

●事業内容

1. たたら製鉄の歴史と技術を保存、公開、実践することで日本の鉄文化を保護継承していく活動
(公益目的事業)

1) 講演会の実施

鉄の歴史文化、歴史資料の研究成果公開のため、鉄の歴史村フォーラム及び博物館講座を開催した。
また、たたら製鉄技術の研究及び和鉄生産、加工の技術伝承者育成のため、近代たたら操業を実施した。

鉄の歴史村フォーラム 2014

テーマ：菅谷たたら山内の人々と景観

期 日：平成 26 年 1 月 8 日 (土) 10:00~16:00

場 所：吉田健康福祉センター 2 階 (雲南市吉田町)

内 容：講演会、フィールドワーク (菅谷高殿見学)

講 師：鳥谷智文 (松江工業高等専門学校人文科学科准教授)

坂本論司 (雲南市教育委員会埋蔵文化財専門員)

木本泰二郎 (榊文化財保存計画協会研究員)

参加者：フォーラム 62 名、フィールドワーク 39 名

参加料：フォーラム 1,000 円 (賛助会員は無料)、フィールドワーク 300 円

要 旨：

史料から読み解く菅谷たたら一田部家事業の中でのたたら製鉄業—鳥谷智文

明治中後期の、田部家の多角的な企業経営の中で、製鉄業、とりわけ菅谷たたら山内がどのような位置づけにあり、生産や流通、職人たちの暮らしぶりはどうであったのか、田部家の史料だけではなく、糸原・櫻井の史料と比較をしながら読み解いた研究成果について発表した。

当時、田部家は耕宅地 (大部分が吉田町内)、山林、温泉場 (湯村温泉)、飼牛、貸屋 (松江市米子町など)、たたら製鉄業などの事業を多岐に行っているが、収支の中でたたら製鉄業の占める割合は大きい。製鉄業の収支が思わしくない状況でも、他の事業の収益で補い、全体で利益を出すことができる。また、経営が苦しい時でも、雇用者の解雇には否定的であった。

島根県の工業生産の中で、田部家のたたら製鉄事業は一際大きな位置を占め、その基幹工場である菅谷鉦は最大の規模を誇っており、生産品は陸路・海路で大坂や北陸など全国に搬送されている。

菅谷たたら山内の特徴を明らかにするために、現在の稲わら工房付近にあった町鍛冶屋 (大鍛冶) の事例と比較した。菅谷たたら山内の高殿、元小屋、米蔵、大どう場、三軒長屋は、いわば管理運営生産のための施設であるが、それらは曾木葺きであり、職人の居住施設の茅葺とは区別されている。曾木は耐火の目的で重要な施設に使われていると考えられるが、生産の場は住居と明確に区別し壮麗な空間とされ、仕事への心構えや誇りを意識できるようなになっている。田部家の他のたたらや鍛冶屋の屋根もほぼ同様な状況で、意識的にこのような空間を作り出していたのではないかと。

菅谷たたら山内に居住者の世帯構成や年齢、流入者については、4~5人世帯が多く 20 歳以下の割合が大きく、近隣の鉦や鍛冶屋はもちろんのこと、能義郡、奥飯石、石見国、備後国からもあった。一方町鍛冶屋では 2 人世帯が多く 10 歳代、20 歳代、40 歳代が多い。町鍛冶屋山内への流入者は菅谷たたら同様、近隣諸村が多いが石見、伯耆、備後、安芸国といった遠方からの流入もあり、理由は大半が婚姻であった。町鍛冶屋からは近隣諸村や伯耆国や備後国へ他出する人もあったが、失踪者も出ており多くは男性で他郡、他国の出身者であった。

菅谷たたら山内と町鍛冶屋では山内内部での縁戚関係は菅谷たたら山内が多く、両山内間の縁戚関係は婚姻による 2 件に留まっている。

最後に、菅谷たたら山内のもつ意味について、地域住民のみならず、日本にとっても重要なメッセージを与えてくれるものであり、地域住民の主体的な取り組みを湧き立たせるだけでなく、研究者にとっても科学的な地域史研究の場となり得る。地域住民と研究者相互の積極的な関わり合いにより、自己発見や情報発信が可能で、教育機関と連携し、地域住民との勉強会やガイド・語り部の育成や活躍の場とできるのではないかと。

菅谷たたら山内と保存修理事業に至る経緯について／坂本論司

大正 10 年に田部家によるたたら製鉄業が終わった時まで遡り、平成 23 年 2 月の菅谷たたら山内保存修理事業着手まで菅谷たたら山内がどのように遺されてきたかを時系列で振り返った。

この事業のため、菅谷たたら山内保存整備審議会が発足し、保存整備部会（実質的な工事の修理方針や復原方法などについて審議）と活用部会（菅谷たたら山内の保護、活用のあり方を審議）とで協議し工事が進められている。復元年代を、たたら操業を終えた大正 10 年とし、使用できる材は極力残すこととした。

工事に伴い埋蔵文化財の発掘調査も行われた。地中に埋設されていた送風管の基部には、製造元の商標も打たれており、製造元が確認された。また、小鉄町は後方に向かって傾斜がついているのが特徴だが、その構築時期の調査も行われ、かつては傾斜がなかったことも確認されている。工事後、これらの遺構は埋め戻されたため、貴重な報告となった。

最後に、菅谷たたら山内は、①たたら製鉄の歴史を伝える施設が集落ごとに遺される唯一の地域であること。②かつて、たたら製鉄に携わっていたさまざまな人々に思いを馳せることができる数少ない空間であり、来訪者の心を動かすことができる場であり、それが大きな魅力であること。③山内のシンボル高殿にはたたら従事者の汗が凝縮されていること。と、保存の意義について述べた。

菅谷たたら山内保存修理事業の成果－高殿の修理工事と山内の今後－／木本泰二郎

菅谷たたら山内の中心的な建物である菅谷高殿は、梁など主要な構造材が腐敗していたため、押立柱を残して一旦解体し破損箇所を修繕したうえで再度組み上げる解体修理が行われた。それに合わせ見学者を保護する観点から地震や積雪に対しての補強工事も施された。今後は元小屋、祠、三軒長屋の保存修理が順次行われる。

調査で新たにわかったこととして、こけら葺きの材（栗材）や独特な施工方法、土壁と部分的に残されていた粗朶の小舞について報告があった。一般的なこけら葺きでは、杉樫が使われるのに対し、出雲地方の社寺や民家のこけら葺きには栗材を利用する事例が散見されることや、栗材は手割りには杉や樫より労力を要するということがあった。高殿も栗材を使用しており、約 135,000 枚の板が使用された。

高殿の復元年代については、坂本氏の報告にもあったように操業を終えた大正 10 年当時ということであるが、屋根の火宇内の施工は当初から注目を集めていた。操業時は防火等の観点から屋根を開き、内部の熱気を屋根から逃がす「火宇内」があり、その脇には建物に着火した際に消火するための大きな水桶が置かれ、見張り番をする職人も屋根の上で待機していたという。今回は古写真の考察に加え実際に見張り番をされた古老からも聞き取り調査をされ、開閉はできないが、形状のみ復元された。

菅谷たたら山内の今後について、現在、保存修理事業が行われる生産の遺構の調査は進んでいるが、実は菅谷には生産を取り巻く社会的環境や自然的環境も残されており、それらについても、調査し、活用していくべきである。たとえば、山内生活伝承館裏にはたたら炭を焼く釜が復元されていたが、数年前の地震で甲が落ちて以来、そのまま放置されていた。この夏、地元の清流クラブというグループがわずかに残る職人を集め、その場所に炭釜を再構築した。炭釜の構築方法を記録することと焼かれた炭を新菅谷たたら山内に展示することが主な目的であったが、将来的にはフォーラムの関連事業として行っている近代だたら操業に使うなど循環していく環境があれば、炭焼き技術も保存でき、文化財としての動きが出て、世界で唯一の環境がここ菅谷たたら山内にできる

2) 体験事業

体験活動を通じて鉄の歴史と技術を理解し、習得する人材を育成する。

①ものづくり大学

1. 近代だたら操業

期 日：平成 26 年 11 月 11 日（火）～15 日（土）

場 所：雲南市吉田町 和鋼生産研究開発施設

参加者：たたら共同実習生 9 名、技術伝承者 2 名、ほか事業団職員 5 名

スケジュール：

- 1 1 月 1 1 日 (火) 炉づくり
- 1 2 日 (水) 炉の補修、炭切り、セミナー
- 1 3 日 (木) 上釜設置、砂鉄装入練習、セミナー
- 1 4 日 (金) 火入れ
- 1 5 日 (土) 鋤出し

今回の操業には、たたら共同実習生 9 名の参加があった。財団職員の吉田が技師長を務め、技術伝承者が班長となり、スタッフがそれをサポートし、2 班編成で操業を開始した。

前年との相違点として、操業で原材料の釜土を変更したこと、羽口設定を変更したこと、座学の時間を 2 日に増やしたことが挙げられる。

釜土を変えたことによってノロが形成されにくく、ノロ出し口付近で冷え固まり、炉外へ排出しにくい結果となった。今後の原材料の選定については土の粒度分布を調査していく必要を感じた。

羽口設定は 4 本・千鳥配置から、4 本・対面配置に変更した。これにより炉との密閉性は改善されたが、炉本体のひずみによるネジ止め不良が生じた。

座学は当財団理事の田中雅章が、日本古来の製鉄法であるたたらと現代の高炉法を比較して、世界の製鉄の歴史編と技術編の 2 編を実施した。

2. 鍛冶体験

ア) 五寸釘のペーパーナイフづくり

期 間：平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月

参加者：129 名（600 円コース、1,000 円コース 55 名）

体験料：600 円、1,000 円

イ) 和鋼刃物づくり

期 間：平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月

参加者：13 名（包丁づくり 3 名、小刀づくり 10 名）

体験料：包丁づくり 4,000 円、小刀づくり 16,000 円

3. その他体験

ア) 松江工業高等専門学校 3 年生との小だたら操業とそのケラを使った刃物づくり

期 日：平成 26 年 5 月 17 日 (土)～18 日 (日)

場 所：和鋼生産研究開発施設、たたら鍛冶工房、松江工業高等専門学校

記 録：砂鉄 17.5kg、操業木炭 12kg、ケラ 32kg

人 数：14 名

イ) わくわくこども教室「プロフェッショナル 4～たたら匠・鍛冶屋さんの仕事体験」

期 日：平成 26 年 8 月 23 日 (土)

場 所：加茂文化ホール ラメール

内 容：小だたら操業体験、ペーパーナイフづくり体験

記 録：砂鉄 12.6kg、操業木炭 17kg、ケラ 2.6kg

参加者：9 名

②鉄・体感イベント

ア) 火焰まつりでの小だたら操業の実演と体験

期 日：平成 26 年 11 月 30 日 (日)

場 所：山内生活伝承館周辺

内 容：菅谷高殿の保存修理工事完了に伴う公開再開を祝って地域の有志と共に火焰まつりを実施し、会場近くで小だたら操業をして来場者らが体験した。

イ) 芽吹きまつりでの小だたら操業の実演と体験

期 日：平成 27 年 3 月 29 日 (土)

場 所：山内生活伝承館周辺

内 容：たたら製鉄のご神木と言われる桂の木が赤く芽吹く時期にあわせ、地域の有志と共に芽吹きまつりを実施し、会場近くで小だたら操業をして来場者らが体験した。

③うんなんこども冒険団

子どもたちが“楽しみながら学ぶ”をキーワードに、鉄づくりを中心とした体験をするこ

とによって地域の自然や人間の技術を知り、理解する機会とする。

ア) ネイチャーチャレンジ in 山のもののけの森

期 日：平成 26 年 9 月 13 日（土）

場 所：雲南市内

対 象：雲南市、松江市、出雲市の小学 3 年生～6 年生

内 容：森の学校「炭焼きに挑戦しよう！」（炭焼き体験）

溪流すべり「川遊び・生き物探し」（川遊び体験、生物観察体験）

参加者：20 名

体験料：2,000 円

イ) たたら場で鉄づくり in ものけの森

期 日：平成 26 年 12 月 20 日（土）、平成 27 年 1 月 10 日（土）

場 所：雲南市内

対 象：雲南市、松江市、出雲市の小学 3 年生～6 年生

内 容：小だたら操業体験、ナイフづくり体験

参加者：12 名

体験料：1,500 円

3) 公開展示施設の運営と活用

①特別展・作品展の実施

ロボット

場 所：鉄の未来科学館

期 日：平成 26 年 4 月 19 日（土）～5 月 18 日（日）

内 容：パネル展示、操作体験、工作教室

入館者：321 名

協 力：松江工業高等専門学校

②委託管理業務

ア) 菅谷たたら山内及び周辺施設

イ) 鉄の歴史博物館

ウ) 鉄の未来科学館

エ) 地域特産品処理加工施設

4) 表彰、コンクール

鉄の歴史村フォトコンテスト 2014

テーマ：「赤」のある風景

募集期間：平成 26 年 9 月～12 月

応募総数：122 点（前年度 101 点）

賞：最優秀賞 1 点、優秀賞 2 点、入選 6 点、代表理事賞 1 点

2. 博物館等公開展示施設における商品の販売（収益事業）

1) オリジナル商品の開発、販売

ア) 和鋼小刀

イ) 和鋼商品（携帯ストラップ、鉬ちゃん、鉬ボトル）

ウ) 「菅谷たたらとカツラの木」商品（ポストカード、クリアーファイル、小風呂敷）

2) 委託商品販売

岐阜県関市、高知県香美市、新潟県三条市

3. 管理部門

賛助会員の確保と普及活動

- 1) 来館者、体験事業、フォーラム参加者等への働きかけ
- 2) ホームページ、賛助会誌での事業のPR
- 3) 賛助会誌「たたらの里山だより」の発行（年3回）